

Title	春秋社編集部編 日本経済の基礎構造
Sub Title	
Author	安川, 正彬
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.8 (1962. 8) ,p.772(70)-
JaLC DOI	10.14991/001.19620801-0070
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620801-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

春秋社編集部編

『日本経済の基礎構造』

日本経済を分析する仕事は、日本の経済学者の任務であるが、わが国では、経済学者に「マル経」「近経」と呼ばれる二派があつて、これまで学問の「二重構造」のうえに進められてきた。しかし現実の日本経済に立ちむかうとき、その根底に横たわる基礎構造に課題をもとめれば、両派はおのずと共通の場をもつことができるはずである。

『日本経済の現状と課題』シリーズの第1集として刊行された本書は、『日本経済の基礎構造』を『二重構造』の問題としてとらえたひとつの啓蒙書である。「二重構造」という言葉は、近代的企業と前近代的企業、すなわち大企業と中小企業とくに家族経営による零細企業と農業の共存とい

七〇(七七二)

う意味で人目をひく用語であるが、企業規模に分類した賃金格差と耕地面積で分類した農業部門の所得格差とが連続して双方を直線をつなぐことが可能なことから、これを大川教授の「傾斜構造」と呼ぶのが正確な表現であろう。しかし、「二重構造」という用語の厳密さに欠点を残すとしても、今日まで水と油の関係におかれてきた「近経」「マル経」両学者によつて共通の場をもつたことは喜ばしい。

本書は三部から成り、第一部は川口弘氏によつて、「近経」を代表する篠原理論(篠原三代平『日本経済の成長と循環』「産業構造」およびその他の近業)と「マル経」を代表して長洲理論(長洲一二『日本経済入門』)の解説と問題点を指摘し、第二部で篠原・長洲両氏が川口論文の問題に答え、第三部では「二重構造の展望と反省」を、宮沢健一氏が「近経」の立場から、伊東光晴氏が「マル経」の立場から、それぞれに新たな展開を試み、今日までの「二重構造」問題を整理して、今後の方

末に西欧技術の模倣から開始した日本の工業化は、いまや全世界注視のなかに高度成長を着々と続けている。日本経済の高度成長の謎は「二重構造」のなかに解く鍵があり、さらに工業化が「二重構造」をもたらした社会的基盤とその過程は、今日の後進経済がやがて自律的發展にむかうための第一目標におくべき基礎をあたえるはずである。こうした意味でも、本書が経済学を学ぶ学生にとつて、『日本経済の基礎構造』を学問的に知るうえに好個の著書に値するし、併せて、本書にとりあげられた原著を読まれることをお奨めしたい。(春秋社・A5・二一七頁・三五〇円)

—安川正彬—

ジョン・ストレイチー著
関 嘉彦他訳
『帝国主義の終末』

本書は、イギリス労働党有数の理論家といわれ、且つ最近では、『現代の資本主義』とい

う著書をもってわが国にも広く知られている

ストレイチーの『帝国の終末』(The End of Empire, 1939)を翻訳したものである。「訳者

あとがき」によれば題名は正確には「帝国の終末」であるが、内容をとつて「帝国主義の終末」としてある。つぎのような内容から成

っている。序文、第一部 帝国、第一章 帝国はいかにして建設されるか、第二章 「硬貨でこんなに賞金を……」、第三章 インドに

起つたこと、第四章 イギリス本国に起つたこと、第五章 新しい帝国主義、第六章 ホブソンの説明、第七章 ホブソン

レーニンの説明に対する考察、第八章 弱まりゆく支配力、第二部 帝国に代わるもの、第九章 帝国の解体、第一〇章 帝国主義は

やはり引き合ふか (一)交易条件、第一章 帝国主義はやはり引き合ふか (二)石油帝国、第二章 帝国主義はやはり引き合ふか (三)要約、第三章 非植民帝国、第四章 九死に一生、第五章 帝国なきイギリス、第

新刊紹介

基礎は、第九章 古い帝国に代わる新しい帝国 (一)アメリカ帝国、第二〇章 古い帝国に代わる新しい帝国 (二)ロシア帝国、第二章 わが兄弟の守護者か、第三部 帝国主義理論のために、以上のように三部第二章から成っている。

率直に言つて、本書についての感想は、イギリス帝国主義についての「収支決算書」ということができるのではないだろうか。あるいは皮肉な表現を許されるならば、イギリス帝国主義の偉大な弁明書ということもできる

のではないだろうか。そのいずれであるにせよ、イギリスはもはや帝国主義国ではなく、ソヴ

エイトとアメリカがまさしくそれであるといふような書き方には、少くとも賛成できない。なぜなら著者は、イギリス帝国主義が

つて世界の各地で行つた蛮行、異民族にたいする征服行為などについて、ともすればこれを「わが祖父の偉業」といふような印象を与えるような描き方——たとえばインド征服の場合にみられるイギリスの侵略政策の擁護のために、インド支配階級の無能、墮落のみを

問題とするように——がたえず注目をひく。イギリス帝国主義の果した世界史における積極的役割を正しく評価することは——たとえばマルクスにみられるように——必要であるが、現代における帝国主義研究は、「帝国主義の終末」という視点においてとらえるのではなく、帝国主義の再編成——但し英国をも含めて——という視角から問題にされねばならない。(東洋経済新報社・B6・四七四頁・六八〇円)

飯田経夫著

『経済成長と二重構造』

少壮の研究家、飯田氏は、最近の経済学が計量的実証研究と理論研究とに「両極分解」し、「視野が狭小」となったことを憂え、全体としての経済の動きを洞察するような「ヴィジョン」に貫かれた研究を志された。そして氏は、このような方法がきわめて「大胆」であり欠陥があり読者の強い「反発」を招くこ

七一(七七三)